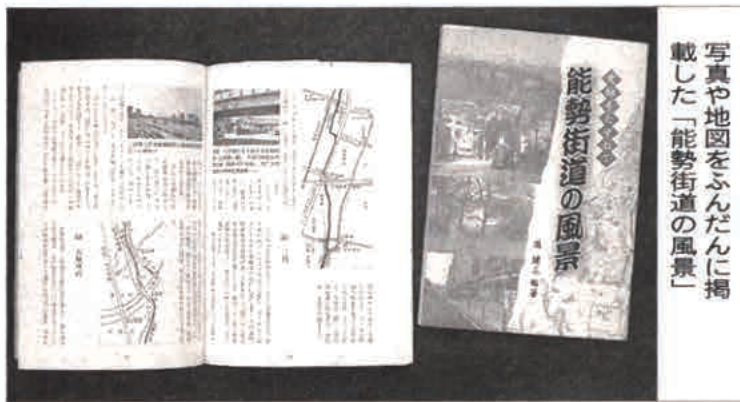


能勢街道 記録残す

郷土史家のエッセー 30年ぶり「復刻」

大阪の中心部から豊中、池田をへて能勢町へと抜ける能勢街道の歴史や風景を紹介する本「能勢街道の風景」を、豊中市立小学校元教諭の瀧健三さん(71)が兵庫県川西市で出版した。タクシー運転手をしながら能勢街道を調べた郷土史家の故・安間安人さんが30年前に執筆したエッセーを復刻する形で構成し、瀧さんが写真を撮影した。「ガイドブックとして活用し、実際に街道を歩いてほしい」と瀧さんは話す。

元小学校教諭が自らも巡り出版



写真や地図をふんだんに掲載した「能勢街道の風景」

写真添え 変遷の姿解説

瀧さんは若い頃、社会科学の授業で郷土の歴史を教えただことがきっかけで、地元を縦断している能勢街道に興味を持った。江戸時代に発展した能勢街道は、明治初期の時点で大阪・高麗橋から府内は能勢町吉野まで全長38キロ。米や栗、柿、酒、木材などの生活物資を生産地の府北部から消費地まで運ぶ街道として使われた。

瀧さんは30年ほど前、堺市であった歴史の公開講座に参加。そこで、講師だった安間さんと出会った。三国ヶ丘の歴史などがテーマの講座だったが、「安間さんなら能勢街道にも詳しいのでは」と思い、能勢街道のことを尋ねてみた。手渡されたのが、運送業界の労働組合の新聞に連載されたエッセーのコピーだった。能勢街道を地域ごと

に北から順番に取り上げたもので、安間さんが休日にくこつ取材して執筆。連載は1984年から86年まで計79回続く大作だった。瀧さんは仕事が忙しく、

その後は能勢街道をあまり調べていなかった。しかし、教職員退職後の2008年に能勢電鉄のウォーキングイベントで4日間かけて街道の一部を歩き、その上で安間さんのエッセーを読み返すと、記述の正確さに驚かされたという。安間さんと連絡を取ろうとしたが、05年に77歳で亡くなっていた。それでも、安間さんのエッセーを本にまとめ、記録として残して教育にも役立てたい。瀧さんはそう思い、エッセーを手に原付きバイクで能勢街道をくまなくたどり、写真を撮影。断続的に5年間かけ、エッセーで取り上げられた場所を全て巡った。安間さんの家族の了承を得て出版にこぎつけた。本の第1章は、安間さんが執筆したエッセーと地図、瀧さんによる最新の写真を掲載した。エッセーでは地名の由来や寺社、遺跡を紹介し、沿道地域の姿を伝えた。第2章は、時代ごとに移り変わった能勢街道の解説で、瀧さんが執筆

(吉村治彦)

文獻を調べたり地域の高齢者に話を聞いたりして、街道ルートの変遷も調べている。昨年7月に初版として400部を自費出版し、9月には出版社からさらに千部が発行された。能勢街道は紀州や京などの主要街道に比べると知名度が低いですが、生活必需品が農村から都市部に運ばれ、庶民の生活を支える「命の道」だった。これが瀧さんの持論だ。「仕事の合間に調べ歩いた安間さんの努力と熱意に感激した。能勢街道が、人々の暮らしに欠かせなかったことを多くの人に知ってほしい」

B6判150ページ。税抜き1300円。豊中市や池田市の書店で販売している。注文などの問い合わせはドニエプル出版(072・926・5134)。



阪急岡町駅付近を通る能勢街道。豊中市